

ルターと音楽

獨協大学教授

木村佐千子



東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。在学中に安宅(あたく)賞受賞。J.S.バッハの声楽作品に関する研究で、ボーム・ルール大学(ドイツ)にて博士号取得。現在、獨協大学外国語学部ドイツ語学科教授、東京藝術大学非常勤講師。著書に「Johann Sebastian Bachs Choraltextkantaten」(Bärenreiter社、2011年)、訳書にラータイ著「愛のうた—バッハの声楽作品」(春秋社、2017年)など。

マルティン・ルターは音楽に造詣が深く、歌ったり楽器の演奏をしたりしていたことが知られている。ルターが初めに音楽教育を受けたのは、五歳から大学に行くまで通っていたラテン語学校でのこと。生徒たちはキリスト教会の礼拝で合唱などを担当していたため、音楽の授業を受けていた。ルターはこのほか美しいアルトの声で歌い、その歌声に感銘を受けた裕福な夫人から、食事や宿舍の提供を受けていた時期もあったようだ。

最初に書いた『新しい歌を始めよう(Ein neues Lied wir heben an)』は、一五二三年七月一日にブリュッセルでルターの教えに沿って活動していた修道士二名が異端宣告を受け、火炎の刑にあったという知らせを聞いて書かれたバラードで、ピラに印刷されて配られた。ルターは、一五二三年の『ミサと聖餐の原則』で「人々がミサの間に歌う自国語の歌がもっとあれば」と述べている。その後、本格的に賛美歌を作り始め、一五二四年には二十四曲を出版。その後も次々と賛美歌集が出されていくこととなる。ドイツ語で賛美歌を書いたのはルターが最初ではなかったが、トマス・ミュンツァーのものとの比較から、ルターが特にドイツ語の意味やアクセントを活かして作曲したことが分かる。

ルターは「音楽は最上の学問である」「私は音楽を神学に次ぐものとし、それに最高の称賛を与える」と述べ、その理由については「音楽以外では神学だけが与えることのできるもの、つまり穏やかで朗らかな心を音楽はもたらしてくれるからだ」と説明している。さらには「私は常に音楽を愛してきた」「私は神学者になっていなければ、音楽家になっていただろう」などという言葉も残しており、ルターがどれだけ音楽を尊重していたかが読み取れるだろう。

また、聖書との関係については「福音は音楽を通して語られる」ものであり、「神の御言葉は、説教されるだけではな

ルターは、一五〇一年にエアフルト大学に入学。当時の大学では、中世からの伝統で、自由七科、今でいう一般教養科目として音楽が教えられていた。法学部を中退し、修道院に入ってから、毎日の聖務日課で詩編、賛歌などの歌を歌い、まさに祈りと歌に浸る生活に。一五二二年にヴォルムスの帝国議会に召喚された際には、宿舍でリュートを弾いたことが伝えられている。

音楽の素養と才能のあったルターは、自らの教会の礼拝に、積極的に音楽を取り入れていった。まずは基本的にラテン語で礼拝を行う中で、説教と会衆の歌う歌はドイツ語にした。ラテン語は文法の複雑な言語で、当時の一般人にはなかなか分からないものであったため、ルターは一般の人に分かりやすいようにと、ドイツ語を取り入れたのである。最終的にルター派の教会ではドイツ語で礼拝が行われ、礼拝に集まった信者たちである会衆によってコラーレルと呼ばれるドイツ語の賛美歌を歌うことが定着していった。

また、ルターは自ら多くの賛美歌を書いている。ルターが「歌われるべきだ」との見解を示している。ルターは音楽が若者の教育について果たす役割を重視するとともに、教育に当たる者にも音楽の素養を求めていた。ルター自身、息子をトルガウの学校に送って音楽家ヴァルターのもとで学ばせたことから、どれだけ教育に音楽を重んじていたかが分かるだろう。このようにルターが確立した賛美歌は、そのまま礼拝で歌い継がれただけでなく、このあとルター派の音楽家たちにとって豊かな創作の源になっていく。

ルター派の音楽家のなかで、もっとも代表的なのはバッハである。バッハは、生涯のかなり長い期間、ルター派教会のオルガニストやカントルを務めていた。そのためルター派の賛美歌と関わりが深く、一七〇七年から一七四八年まで、ケーテ時代を除くほぼ全ての時期にルターのコラーレルを用いている。また、二〇〇を超えるバッハのオルガン・コラーレルの約四分の一以上がルターの賛美歌による。このことから、バッハのルターに対する特別な思い入れが窺える。バッハは単に職務として教会音楽を書いたのではなく、信仰に裏打ちされ、著作も使って研究しながら作曲していた。また、そのバッハの教会音楽がルターの教えをさらに広めるのに貢献したとも言えるだろう。